鈴木氏の報告をめぐる討論

鈴木氏は，江戸期商人が封建制の下での多くの不平等や制約にもかかわらず，家訓等にみられるように，経営理念の確立，合理主義的思考，雇客志向主義を示したものとして評価し，それらは現代においても多くの示唆を与えるものとしている。同時に，鈴木氏は〝新儀停止〟や〝祖法墨守〟に示される安定志向が，江戸前期における新興商人の革新性を喪失させることになり，明治維新期の変革にたいするかれらの対応能力を失わしめることになったとして，その限界についても指摘している。

討論において取りあげられた主要な問題は，第1は，日本と韓国における商人，商業経営の比較の問題である。第2は，江戸期商人の現代への連続性の問題である。第3は「家」の存続にたいする儒教の影響の比較の問題である。

第1の問題にかんしては，啓明大側より，韓国の開城商人の「にんじん」の生産，輸出におけるマーチャンダイジング，製品標準化や品質管理を例として，たとえば日本の近江商人との比較が提起された。両国の商人の間には多くの共通点があることは認められたが，十分な掘り下げはできなかった。

第2の問題にかんしては，報告者よりつぎのように説明がなされた。大多数の商人は維新の変革に対応できず，下級武士出身者が台頭した。そして，流通部門は依然として古い商人によってになわれていた。しかし，明治中期以降新商人の台頭がみられ，その中には古い商人階級から適応した層もおり，その意味では，江戸期商人の現代へのつながりの点では，断絶と連続の両方の要素が存在する。

第3の問題にかんしては，啓明大側より，祖先の職業を守るという〝祖業墨守〟の考え方や「家」だけでなく同じ「王朝」を守っていくという考え方はあるが，日本にみられる長男でも家業を継ぐのに不適格な場合，娘に養子をとり家を守っていくというようなことは韓国ではみられないという点で，矢張り儒教の影響の仕方には差異があるのではないかという指摘がなされた。

なお，上記の問題のほかに，開城商人の複式簿記と近江商人のそれとの比較やイタリヤ簿記との年代関係，マーシャル経済学の「欲望とその充足」に関連して，江戸期商人の〝誇示の欲求〟，〝生活水準向上の欲求〟のあらわれ方についても取りあげられた。

（稲別正晴）